今月の窓

日本の美しい原風景

新緑の季節，私が二年間勤務した青森では，この時季の緑の美しさを「春もみじ」と称し，新緑の季節にしか見られない緑の多彩さを多くの人が楽しんでいる。とくに，八甲田山から十和田湖にかけての八甲田・十和田ゴールドラインの緑は素晴らしく，ブナの明るい緑と残雪の白のコントラストが目に眩しい。厳しい冬から解き放たれた開放感に満ちている。また，この季節の農村風景も同様に美しい。新緑の里山に抱かれ，水田の緑も色を濃くしつつある。

新しい食料・農業・農村基本計画が策定される過程で，昨年12月10日の食料・農業・農村政策審議会企画部会では農村の振興について議論がなされている。その議事録を読み返してみると，会議の冒頭の部分で郡司副大臣が「『日本の美しい原風景』という言い方をする場合に，その美しいということの裏側には，農業を初めとする生産活動というものがきちんと行われているという中で美しいというものがあるのだろうというふうに思っておりまして・・(中略)・・やはりそこには人が住むという営みがある。そしてその住むという営みというものは，所得があって，雇用があって，子どもを育てられるような集落が持つ本来のいくつかの機能というものが備わっているということが大事な要件にもなってくるのではないかなというふうに思っております。」と述べられている。

日本の美しい原風景は？と問われたら，日本のふるさとを描いてきた原田泰治さんの絵画の世界を思い浮かべる。田んぼや畑，小川とあぜ道，そして元気な子供たちが登場する中山間の暖かい風景。

４月に原田さんの故郷の諏訪市近郊を訪れた。山あいの村の田畑は傾斜地であるため区画は小さく，とても大規模で効率的な農業生産が実現できるようなところではないが，きれいに整備され，春の花が訪れる人のこころをなごませる。水が清らかに流れ，落ち着いた村落の風景は，まさに「日本の美しい原風景」というべきものだろう。人々の暖かみがあり，元気に子供たちが遊べるこのような環境は，たとえば「春もみじ」のような自然からの贈り物ではない。地域の人々が助け合い，生活を営んできた結果の風景である。したがって，所得や雇用や集落機能がなくなれば，このような風景もなくなってしまう。

そのように考えると，岩盤政策の導入として評価できる戸別所得補償制度や新しい基本計画に示された「農林水産業・農山漁村に関連する資源を活用した産業を新たな成長産業にすることにより，６兆円規模の新産業を農山漁村地域に創出する」こと，中山間地域等直接支払制度を予算措置から法律上の措置とすることの検討は，市場原理主義の実験に失敗したわが国の社会・経済のあり方，地域社会の存続，暖かい日本の原風景の維持にとって極めて重要な政策だと言える。

美しい自然の風景と同様に，我々が守り，後の世代に引き継いでいかなくてはならないのは，美しく暖かい社会の風景である。都市と農山漁村との均衡と調和が図られ，農山漁村地域で人々がいきいきと働く環境を創出できれば，農山村だけでなく寒々としたシャッター通りと化した商店街も暖かさと美しい風景を取り戻せるはずである。

（(株) 農林中金総合研究所　専務取締役　岡山信夫・おかやまのぶお）